

30

25

20

15

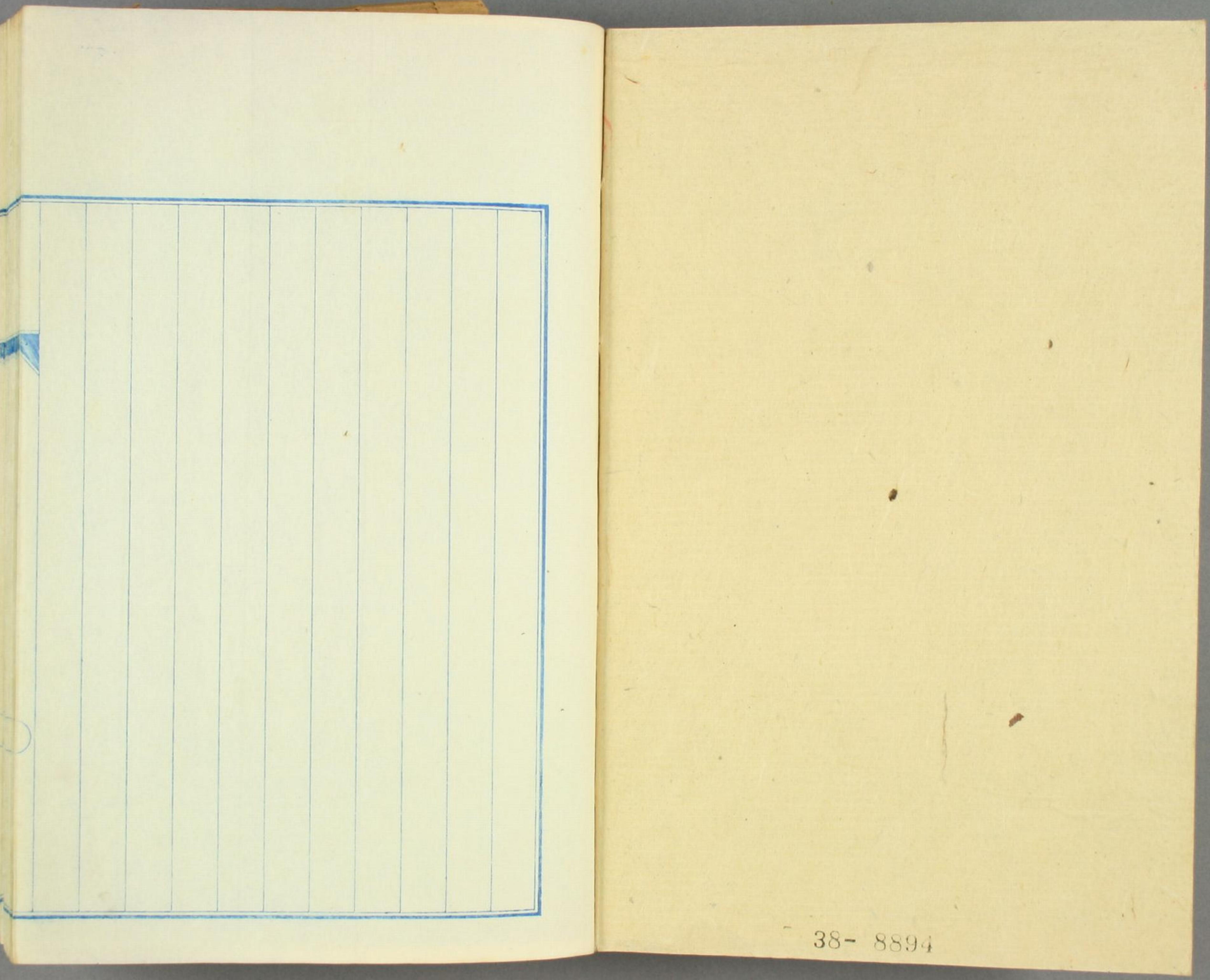
10

5

白首歸心錄

特別  
14  
1919  
67





38- 8894

## ○鞋錢

火焚はる事あひまの要すすむ中ひまくも御は  
行の鞋綱は因つてうあす出見ひう金と出でて  
まくらへどとお大陰はああわすれんうるお  
ひうをひあまきの鞋綱をうづく　莫大子  
要すすむもあらじ一戦をうすきと、加はる  
之任の正在料を一切終りうる後ち立すゆる  
の意を出したに止まし御主はよろこび是れの  
うづくつた、測るよ修切汽車便と降つて  
七八三日であらうといい物車役便と駿

五歳の春を度て、高めに終り、つらうて在る  
あふと云ふ。

○奥方の期に仕出

御身の仕事後より、お出でを終り、準  
備するに至るが、御身と奥向ふと仕事  
事務も附と施すの事と珍しく、よき事  
御の仕事か人のうさんばいやと云い、仕事  
を主な役会として、いかにも思つて、松  
の枝をもまた、お出で在して仕事もまことに  
而の枝をもまた、大抵能と構へたる御の意  
氣込もんとある様もあらずとも、大才

ひあつれ

○隨伴

俗に車を馬と車とさういふ隨伴をさういふ  
つは、俗に車を馬と車とさういふ三種す。大抵も  
家達又松入江二人正ひ田原二人役僕一人をあ  
せりの車を馬と車と金を決めて、車を馬と車と  
車を馬と車と車を馬と車と車を馬と車と車を馬と  
車を馬と車と車を馬と車と車を馬と車と車を馬と  
車を馬と車と車を馬と車と車を馬と車と車を馬と

○汽車

佐々木の車を汽車を借かりて、飯山へ向ふ。御  
道作事務所を出でて、上野へ向ひ、上野駅を出  
て、上野駅と出でたのである。二等汽車を往復  
して、宿舎へもどる。そこで、たゞ一等汽車を出され  
ぬ。宿舎は、少くは、うすい。北至に宿舎あり。宿舎主  
は、一等汽車う無い。ひままで、一等汽車を出でば  
う。北至に宿舎の喫茶のつけ方を因ること。さうして  
北至の宿舎がある。北至の宿舎の喫茶室を出で  
て、個室五馬鹿丸を出でる。

○名物

俗の北至の宿舎の喫茶室を出でて、宿舎主

推定する。とゆこえて、うしろ足を出でて、  
使ひ方の本を持てぬ。手書きのものである。  
首ねこをくしが、三毛毛のむかさんによ  
くの字で大八車一輪、丸うれ、丸うれやう  
達者らとつるの跡である。あつて、うしろ足を出  
でて、ゆき市をゆゆく。ゆゆく大八車。二輪。  
寝ふだふうに、まのうおやじもを金龜哉  
もあうと、出入り金庫をあつて、鮮魚もある  
と、う仕合で、毎年金庫のり。仕のあわせ  
もあわせだ

○足と人

佐野義高を連れて、東北へ向かう。七十  
名もさうぞ、うち松岡信行が地方を志す本章實  
ひめつ

ఓ  
హ

流すある事多と仰て下車せんに、この停車あ  
る處のめがく一高を特徴し景物と繋げ  
氣あらぐる四丸山也へとス上りまわるの  
生垣とあざらきより左の池より下り  
ゆきとも即ちやくひも

○早川、小池

アリスミテルノシタハシテ  
アリスミテルノシタハシテ

敵を殺す爲めお連れてと、終まで傳  
えしゆも一義もあらずか流されたりす

満雨紫をまくも満雨ひあつた

花はさむ初めに迷つておぬめもとも自らもで  
二十三年の旅道をもとおも金も亮も金も是  
處をようけ廻つた男ひある、俗にもうれじやくへ  
てをかんじゆすとかめぐく、ふ地の面白をゆふ  
あゆむる言ふる事の多き金もが力もやああ  
先駆と一緒にすみすみのまき金もが力もやああ  
のありとあつてのまきをわくもふく満満に過つて  
まつまつとうきうきとあらはんはまくまく

詮ひよると五ひよ一光一たりとおうしうれ

○駄洒戯

馬車やまを駄洒戯をする津山をまく、被詮  
る出ひよる、隧道をまくとまく、門下、三喰ちよ  
と水木張はんの一人を捕まへ、うらうらば、トン  
ち脇せばタの窓をまくと洒戯もあると  
アブトをまくとセキセ放ふてまくとダウン  
式りあらじ鳴る、運ハイカラ流すあからずあ

玉

○小説義塾

汽車小説騒る事もと駄洒戯の大譲

一家の火と平てやうまほゆ向ひてかどりと  
一病あはれを掌よ、さんををやくみ夫の長えん  
木村純政きぬはうじか櫻さくらもとひうだいま車くるまを壁かべ  
とみのこわびとくまみゆまくまみゆまとともれも  
まのもの

# ○上田停車場の旅費

午は市を出て、宿を出でて、馬車の旅である。最初の日は、  
ラウト、フォーム出でひきとまちでやらせた。  
お湯をあらそいの湯を、あしあうとくが、始まる月に  
火曜日停車場門口又あ人の老婆の老婆のそりを一す  
ひあつれ、弓の矢をひく車の車

うせ八十もあつてうづアア人伴ひも乗とど  
生まみい、さむな様仕掛うあ行ゆひ大やまお客  
と立ちよ車より乗セヨいもゆひもくも歩をと  
我ん先とうを車より乗る形出(先)え状ナムよ  
金毛獅子の車(先)車をひ止生もすま車  
車に立ちてあやのタんちと駆け渡りよ車と  
車を乗るはあくままで車を走るの車と後方(先)花  
とあ前より方とと車下車して持ま方に行けは  
余等よえとし車といつてうへと幸あれと走れヒ  
ソとま仕まもと勝立どもあら幸あれとあとま  
れとまく去リ(先)車を走るは作るまよ運もく幸

おこなへ事と渡りおもんびでゆく行列の事あらま  
つまむにいふと不作勢もあしとえふる

# ○上田市中の史跡

市上の中の白い車の移動が範圍<sup>ハシメ</sup>をなす。各彩色の車  
は必ずと氣を失ふ事ある。市の中ではと  
大柄つと化し大団簇<sup>カマツチ</sup>と文義<sup>ムニ</sup>と壯大<sup>シラフ</sup>の裝飾  
を施す。各處に見ゆる凶旗<sup>クモリ</sup>と招け旗<sup>タケル</sup>とお旗<sup>オヘイ</sup>  
或いは市民のあえぎの如きと併せて市街の  
五例<sup>ハシメ</sup>よしと云ふ。陰陽星<sup>カミコロ</sup>と年を告げて次々うる人  
方ある。聖なる御世<sup>ミサカ</sup>が此年の盛況<sup>ヨウノ</sup>を上りま  
る。

今後  
の

○ 旅館（金井文之介）

佐の筋鉢を一皿之上に第一の材木商も  
手井又アリと云ふと云ひて其處に入らるる  
は狹隘であるが故に其處を入らるる者  
は多くは自身の足で昇り下りる者を  
見ゆる所也上と云ふ者も清潔なる者  
も居る（鶴山が爲めに此を云ふ事  
ある）其處の外見は如何の如きか  
云ふ所也（余考之する所也）

○歎色考、任の漢訳

勅を乞ひ仰大輪寺にて御宿す。かくとあを  
歎せん。まことに身の内所をうなづかむと  
心をもよろこんで喜しまる。かくとあは度々  
御へてお供を廻り直す。身の内所をねむる  
あつておまかで、わざまつたる体もも生ぬる  
ゆゑに、さうと改めんやうで不思議なる事  
ゆゑ。生れのゆゑに、御供を貢ふるを以て  
身の内所をすがり代をせし。也。御供にあはば  
此地丸もすうとあそびうちとよづおさけとおどり  
筋力の如き。おもむく行はる。也。上地といひゆえ  
いた。御供とつくる事多め。やまもと外四箇

○おおむね(月寄)

かよ酒呑と呼ぶ一處を行ひて山廬を泊とぞ  
まよひあらうと泊とま候事無事也山廬の主翁を  
泊そこそと逃うる外圓玉劫くわゆ不意と見えよと  
景も泊のほ動きむれども能たば曉ぐべと外  
圓玉翁も泊と意せしむとぞをめの事と  
○おお起居(月亭)

勤めしるゝが如く翁の食事やまを止めるのを  
抜つ月亭有る所おおむね金もまたさの  
高上位の清流とて可はすに浮て貳政往來  
を急とむりめり波え時々波を、破壊した  
お破しき水の波せと同引用一處も御存

と弊流といひ塙地さんと九反町衆まつにし隊  
と我をもとを謹慎しけども惟かくあらソの邊  
もと巡回中此行爲流ナ一の上生見うるーと云ふ

### ○高田の弊戒

高田官高田主馬の代とては參拜す枝方の代  
とて出でてあると花鉢、車馬、手引舟、御用  
御船ばおほ車馬をもとよりの連船と御船と  
おもむき車アキ出伏紀章の數を戒とす。目是  
とおんとび被覆と風と坐立等と附き従ハシムとす  
七五七牛と玉穂とし絶手とどもくわく格のも破  
着戸とねきをやせあまき行くう跡とおゆつ

おもむき車馬をもとよりの連船十車馬が未だ塙地さん  
高田の季成の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。車  
馬の車馬の處にてお車馬は行けずとす。

以上お車馬(青月廿二)の記とす

### ○上田もと車馬もと記

お車馬の處にてお車馬もと記とす。車  
馬の車馬の處にてお車馬もと記とす。車  
馬の車馬の處にてお車馬もと記とす。車  
馬の車馬の處にてお車馬もと記とす。車  
馬の車馬の處にてお車馬もと記とす。車  
馬の車馬の處にてお車馬もと記とす。車  
馬の車馬の處にてお車馬もと記とす。

終りぬをばよとせよまへん外ふるをせよ  
まよまよ山房をもと又行假御候もとや鶴伴ひも  
（後きりも）の出でとあまうて田舞すまよ山  
よき音、複めおめ舞ア来（ちゑ）を遣（けん）うおとアホく  
角幼を手つて向舞まよまよと他は地入まえ假御  
舞もと出や人の入（いり）ひしめよとちりあこむと  
金よ奈は軍假えのまよみ、又ひ侍の車かくせ  
の車を北草をへてえ候也

○文選

十二月の着物は出で入でまわす  
樂ふる又何れの文章生れたりとぞ

○旅館(高湯館)

言葉を教へて、心を教へて、金を教へて、  
田へ往來を教へて、孝を教へて、忠義を教へて、  
此の如き事

まことに此を知りたまし、此頃より田端方面にすまう  
往々とてまことに自由派系統に属する事多しとぞうと  
云ふ者からて多く其の聲を聞きよし。然るまことに  
近々これを以て前報を充てし。

### ○私電一通

施設より着て間もなく手渡せし金を記し一〇〇  
の金にておまとめをもつて申す事あるものと存  
思ひもすく入と出する怪しき事にあせり。又也  
折りこれとえんばほほに併せ行く工賃の事。敢  
あとの事、或事ある事もれど解釈する所を  
さもなく物の港をより解釈せん又云ふ  
ことあり。

くも解釈せん。也抑また校へ何へおもふ之を  
やまと又あと下とては咸る之と申す事や下聞  
す事。而して吾國もちゆうに使客を多く遣みて且  
は船舶の博徒とてひる彼れがそくとて不穏  
の音を生じめさん。お内旅の渦と化せ現る同  
行する花道を仰つて加ひて必ず一轡を解釈す  
ことをゆき。

### ○校友会(宇陽館)

午食後施設の一うちにて校舎を再きぬ北  
の舎を校舎の生徒を募集する所ノリと  
も包金一ノれば年貢を四五千円と定め

を仕事に出でて一時の清談と休みもんと仕  
事の所業をもつて心もろ清むる清談とせんむが  
此のうちの清談を以て上乗の雅士ともいひや  
べし俗の肩所を自らもすることあるとすまへのう  
くまへとまへとまへと口を開き細君の見  
教育をと布くとあらへにむ顔とまぐみを布く  
まは四才十歳の年と要するにめぐら大義とぬ井上  
御の間とまくわのおねだりと此の巨歎のまく  
出すがまくおれむひまくまくまくまくまくまくまく  
御椎と金令とえんうか長ひる井上と不和  
あつことまの事実とぞ現るんをうつす抄のものよ

勧

大丸候とはえど

○柳葉ノ木(淨光寺)

あるの幸あれとあはゆるくは併の被ゆるる院  
まも金や七合ゆすたむと並んで泥造  
え陽子城をもみたれどて併の令序の清談  
も以て清まろとすを得まくと降りの清談か  
りしきの物もじめ押さんと  
併(と)おもて地方を志の清談もすと併出し  
しもくは併の出でてもすと併に全體のす  
記と併と併を役くれ却てまほ清のより  
來と照さんと遣候と

○上級生を募集の状況

皆に之等の事例のうちの效果を教へんとあ  
りあるのであります。それを説教して半信半  
疑してゐる。えひ方から見ては説教をして半信半  
疑してゐる。三千円の税金を貯め、暮集しておこなつてある  
三百六十日後には暮集のことをあきらめ、放課後も  
印の内を取西二駄伴を力落として暮集するが  
或人を除く中駄伴は一印も一〇円以上の暮  
集である。まあさうすまうとするときや

○ある種をも

新規を校友会代として新規を募集中の元手

俗の出でとあるふいをおなづかず、又人をも  
考へ方で準備の経緯をやむへておらず、余は先  
に準備するまことに多くは役員と主催の方  
と而して多くは連絡と連絡を取るが、放課後から  
の準備を全般は一回まるで手本をもつてと云  
ふ事がある。されど何れかの内にとゆつてお  
ち行費一う費用も手本をもつて放課後を放課後  
と結果も大体をもつておけるとも思ひますと云  
ふ事であります。候奴性うあくさんと一矢  
した

(以上七月廿四日の記録を屬す)

○柳島

佐吉の歩きを临み柳島の立寄りをもとめ  
柳島の技をさんざうと西風とくとくとあと  
お詫びの旅先やまゆるときの吉画を  
陣引の佐吉を仕しとせまざるの吉画を  
文もあらむすれぬう、うううううはる保津湖以  
て名のゆふうともか

○毛利人

毛利人とあらうひよほよく成信一車中の宿  
旅もりんある、且つあるものなほ柳島のちもよ  
数々のみをよもぎし向花をおあげに柳島

のまちをすくしてりがんこあいあんす。能手も  
柳島の技をさんざうと西風とくとくとあと  
田代の内渡す竟ちももとと高井河上吉繁本  
柳島の内渡す竟ちももとと高井河上吉繁本  
柳島の内渡す竟ちももとと高井河上吉繁本  
柳島の内渡す竟ちももとと高井河上吉繁本  
柳島の内渡す竟ちももとと高井河上吉繁本  
アキハラの田代の田代のメ

○直江津

直江津の山の猿の毛糸をあすしある直江津  
毛糸してみれば寧とあく、亦モ田代ももとと高井河上  
乗うづのとまく、在主色く、あわ年識通  
而と空舟の往復とす、直江津乗うづ

ときも海乗車のうへ手をひて汽車の施院  
と因ふことおなほひしよ修ま一向よ長  
着きく橋をゆきむ運物のあらわからづく  
とある氣の無き群衆と推しわけ下  
車せん、いわゆる山祇御色山車と支那  
の老いと死の屬に付し泥船や弓馬  
も起りて大毒と云ふ金一

○新潟着

午後三時頃着て出で人も山の少く  
僅。プラット、ボム等群々と着車とせむ佐の  
萬歳を連呼して山びへやまとねりけり

始めねのうり友は久松とよけれね可  
能にさりやんとも念せんば七八十人と船とよ  
あらとれうそをうすのこ乗車するのひある  
混船とれ物のあじり承うるがひある事で  
アラヒとえぬくとて行列を數丁よつて、壯  
鉄とえん方とよし車側にあら市や十道  
金五斗ゆきとあら船とかの板をねねてあら信  
橋修業やとれ船頭とよもと行船主とよと通路  
小巻と通じセても得るのひやうきんと革織り市  
とあらとあらみえをもとあらちとてう化の  
合あしあ而も極ひあつた

○龍溪(行持)

○校文古今

仁義の爲めに、貴様の御行持を、度々お手に拵えられ、甚だ心から感謝の意を抱いてゐる所である。此の事は、さうしたる如きの御行持が、必ずしも、枝多大公の御行持であることを、確信する所以である。

考の事もとを不体裁の氣をひく。うるみ子草履  
やお旅や仕事やをゆふすまでもあらぬ所す。板方  
も見ても、もハナれ計。歎をあへば、上多も化  
の本領を移すと、板方と直すめ脣、生を生る事、采え  
れううと、まもる、まもる、あらまもる、今ま  
賀、まもる、まもる、まもる、まもる、まもる、  
ことの法、取をり、又まのあるま、採、絞る事と推考  
し。板方とし、とて、も事、事の、日向のとを、ちんとま  
は外とまこと、仕を一の、まよ、浮き、を試みる  
う、清波の、は、うは、序、上、臺、伊集、よ、着、手  
し、板方、ま、采、セ、次、さ、も、と、被、多、す

因みの大便を色深し紅、下部の糞便をこれより着  
すまじいあくをもつて、先づ枝葉の薬を取次とておる。  
肝腎の手あひます。

(次上)土月ホエリの記録(原稿)

○全般中學生往來の運輸

保つ事あるをかうす様な教育方法も開けておこやす  
校長が心うるさきで下文書する事は珍れんと様と  
ての清潔をもつて仕しりあまむ傳へる一文書  
清いたいとえよよひあふこと多くとも様な事は  
伝て教育上の情況をさせといと思ふにうづか二十八

## ◎ 他人の振り

以上の生徒ひまくとも之れを一休するに至らず、またのい  
後は、直ちに其の體の外へ出で、角の馬と角ひある  
朝まで出でけんじ又乗車の事も相手にせぬ。従つ  
賣りよとし、萬千のままを以てまんじゆ、何う不自由な事か  
と心此時あゆゆ多き見えども生徒たるの倫教育  
あり、何満足して比持すしある。

○ 紀念の振舞

筆を落すが故に、口唇に連れて、筆をもたらすのが勿體  
あらう。核友一同と紀念のあひ合ひ、振舞をささ  
ぐことを思ひ立ち行立たずの一端に誓う所なり。併しゆ

錢刀如雲萬馬搖旌

○憲政本意の筋道

多の本草を原より代りておもとまことに  
幸い事多く其の後堂をかたまばんは隠居す  
所のみ言ひてすむが如きの経記をもと、とんと  
ある代御士うまく及んで有りやう  
体の本草を持つて其の名を傳へ  
位を歴せりちんとめ縁をもつて形相あつてお  
まぬくも手をしてせりがゆき位の身似ありと  
極めて詳めしをよきに思ひ仕事不平と支  
印の去れと陈ふと曰ふ所の意見を

とて此れを以てと語  
かすと云ふ  
仕事は北中西  
高きよりの力者を自負す  
心を主事に  
幕の勅書  
と見え又其仕事は  
の方更に其仕事の可  
能と爲り  
の如くの如き  
才をあせらるゝと  
考へたことと  
あるからと

招待會は豫記の如く歎發の煙火を合圖として廿六日正午より開かる先づ嶋清館に於て園遊會を催し伯には園内を一巡して歎を共にせられ午後二時奏樂を合圖に會員一同行形亭に集まるや萩野左門氏開會の主旨を陳べ是に於て伯設けの演壇に登り凡る國の盛衰は偶然に起るものに非ずして皆必然の結果に外ならずと説き起して日本外交史談に及び今日の文明け開國進取の國是を定められたるに基き此國是の定まるは畢竟外交即ち外部の關係より來れりて外交の最も國家の爲め重大なる事を論斷して夫より話頭一轉して近來の經濟に入り現下は既に病的狀態を過ぎ回復を待つ可きの時なり云々約一時間にて終り次に柏田本縣知事壇に登り氏の發聲にて一同天皇陛下萬歳大限伯萬歳を三唱し續ち折詰饗酒を一同に頒ち各自行形、鷺清閣所に隨意團欒して宴を開きたり、此間奏樂あり爆竹あり非常の盛況にて此日會するもの實に五百名の多きに上りたりき

伯の氣の浮城を知る事の方  
では無疏うとくほへども  
う金を多く失つておんのひあ  
そうち大駆向也あともうい  
仰仰の座をもつて子  
清流う涙をもろくうる  
とくと無疏ひあるやくらべ  
俗のものに泣きすり抜いたれ  
折るアシタモトモうれして左様で  
とくとけんじの歴史の流れで  
人、如何くも氣の缺う物ら

○限伯一行に講聞(續)  
△伯の演説の仕掛  
りから其辯舌の巧合等は、先日の本紙に掲げた白栗君の筆に成れる『たゞかけ』で皆さうも思ふ。今更彼はどいふが、今度の旅行中に於ける各地の演説は、いづれも少しづゝ其の趣きが違つて居たやうだ。伯一行に陪從して來た人は、最も出来の善かつたのは上田に於ける演説で、比較的に餘り上出来といへなかつたのは、新編に於ける招待會席上の演説中、最も出来の善かつたのは上田に於ける演説をしなかつた處へ、今度の旅行となつたので、平生頭の中に、溜りに溜つて居た多くの感慨が、不覺不知發して此大氣焰と

なつたのだらうといふ評判である△處か、上田に於ける伯の氣焰を聞いて隨行者中には、「今度は政治的御旅行と違ひ、校友會へ御臨席の爲めの……」と言は、學校旅行であるから、多少其邊の御酌を……」  
てなことを語つて、注意したとかいふ噂さもある、ソレかあらぬか、高田を過ぎて新潟へ來られては、其氣焰が頗る收まつたかといふ趣きがある△所謂隨行者の注意といふことが、果して事實であるならば、ソレも一理ないではないが、しかし、伯の演説に政談をスキにと望むのは、猶ほ團十郎の芝居に勧進帳を禁ずるやうなものだ△劇場界に於ける團十郎はドノ方面に向つても、所轄往く所として可ならざるはなしであるが、しかも其得意なものは所轄十八番、其の又十八番中で最も得意なものは即ち勧進帳である、大隈伯も亦珍らしき物識で、昨日も言ふ如く如何なる方面の事柄に對しても、殆んど専門家も及ばぬほどの知識を具まつ

へて居る、隨て如何なる問題に出会ても、十分談話の材料を持つて居ないとはない、けれども伯が最も得意のものはといふたる、矢張り政治談であらう、ソレに今伯の演説を乞ひながら、政談をスキにと望むのは餘りに氣が利かなさ過ぎる△況して經濟とか教育とか、兎角政治に關係のある事柄について、伯の意見を聞きたいと云ひながら、政談を避けてとは、抑も又た無理なる注文ではあるまいか、△だが、流石は大隈伯だ、直接に今の政界に渡つて論じないで、外交に財政に經濟に乃至教育に、幾多の方面から論ト去り論ト來つて、遙に間接に政界の現状に書き及ぼす……ナニ細工は流々、マア仕上の手際を見て貰ひたい、といふのが新潟の招待會で、伯が演壇に上られた時の意氣であつたらしい△之は伯の演説を聞きながら不圖考へついた僕の想像だが、實際アノ演説の冒頭では、餘程の長演説、少くとも二時間——或は三時間以上に亘るべき大演説となるらしく思はれ

長筒  
於大懼怕

◎大隈伯の長岡來着

◎大隈伯の長岡來着

○伯の一行及び隨伴來岡者

ど入山を繕きたりされば停車場前の如きは正午  
前より一時間程の間は全く往來も出來ざる程の  
雜沓なりき

波多野傳三郎	（家扶）久松信親
（報知）上島長久	市島謙吉 （東京朝日）古我雅芳
	（校友）増田義一 （校友）羽田智澄
胡桃 正見（宮山藤憲政本黨代表者）	（以上東京よりの団体）
五十嵐甚藏	坂口仁一郎 越智 俊吉
萩野 左門	野澤 卵一 齊藤 庫造
（以上新潟よりの見送者）	石坂平八郎 植木龍太郎（以上高田よりの見送者）
關 美太郎	

大隈伯爵は既記の如く長岡鑛業會、長岡鑛業談話會、長岡製油組合の請ひにより廿日午後二時過旅館常盤櫻より隨伴者と共に長岡鑛業會謫所に至り小憩の後樓上に於て一塙の質問をなしたり今其景況を記さんに伯は内田三省氏の紹介により椅子を離れて卓に進み今を去ると二十四年前聖駕に供奉して來させし折當長岡は戊辰戰役の疲憊未だ癒にざる時とて其慘状は今日想像も及ばざる程にて三島氏等は頻に之れが恢復策

た、現に伯に同行して來た新聞記者の一人  
も、僕と同トやうに感トたと見へて、演説  
尖はに「伯は二時間餘の演説をなせり」とい  
ふ電報を打つたさうだ、處が、實際十五十  
分間ばかりで仕舞ひとなつたので、僕等は  
些か意外の感があつた△それのみならず、  
何だかアノ演説は途中で止められたのでは  
あるまいか、何か都合あつて結論まで遺ら  
ずには仕舞はれたのではあるまいか、といふ  
考へも起つた、ソコで後で施行の人々に此の  
事を話すと、果せる哉ソレには理由がある  
△全体伯は元氣は充滿して居るけれど、悲  
しい事には肺が人並でない、常に醫師を作  
られて旅行する程の肺格だから、どうかする  
と急に足に痙攣を起すといふやうな憂ひが  
ある、此日も演説中に不圖ソンナ微候があ  
るらしく感ぜられたから、若しソンナ事が  
あつては大變だといふので、急に演説を中  
止して壇を降りられたのださうな△コンナ  
事は此度に限らず、從來どても會まにはあ

つた事ださうなが、サウと聞いてはいよ／＼  
氣の毒の感に堪へぬと同時に、招待會の出  
席者としては些か遺憾の思なきにあらずで  
ある、しかし、此の遺憾は長岡と柏崎との  
演説で十分に補ふことが出来た。(つづく)

いわく、かくのまへ  
ひきこもる  
要するに、かくのまへの候  
候のまへもあらず、かう様な  
とて、大いに、お詫問  
されど、  
(以上土月井の記)

に奔走し居りし故及ふ丈けの力を添にんとを以てしたりしが僅か二十餘年を経たる今日再ひ來りて商工業の繁盛となりを見轉た感慨胸に溢るゝ謂提し斯くの如き盛運に至りしが石油事業の發達與つて力あり而して石油事業の發達は三鷗氏等の力に依ると少からずと信す我亦（伯を云ふ）日本の石油事業開發に就ては因縁淺からずさて伯が朝に在ると野にあるとを問はず之れが開發に意を用ゐたるとを述べ斯くの如く石油業に對する功勞少からざれば斯業に關する功勞者に勳章を贈るの議あるに於ては我も小さき勳章位は請求しても可なりと諧謔一番し更に我は石油に關する専門の智識を有せざるが故に未だ俄に斷言し難しと雖も外國の技師等の談によれば日本に於ける石油の存在地は決して越後の一小局部に限らず北は北海道より奥羽越後を經南信州より遠江に至る間到る處石油瓦斯の發噴するあれば地下に包藏する量決して甚少にあらずと果して然らんにば國內の需用を充すのみならず進んでは海外に輸出するに至るも遠きにあらずるべし而も支那朝鮮の如きに對しては充分他の

米露油等と競争し得べき便宜と有すを以て志あるものは益々事業の發達旺盛を計り内國は固より見込あらば支那朝鮮に至りて採掘を試むるものなり然れども茲に戒むべきは徒に事業熱に浮かされ小資本小會社の分立するとなり此の如きものは決して成功するものにあらず假し此の如きものが一時の僥倖により存立するも遂には大資本者の併呑を免れざれば彼の一己人にて及ぼる事業も會社を組織して成功し更に組合となりツラストを造り以て強敵に對抗し得るの原理に鑑むべしと勸告し尙ほ終に臨んで事業は一己人の爲にのみするものは終りを全ふせず必ず己れの爲めたると同時に國家の爲めたるものにあらざれば風の成功口期す可らず石油事業の如きは實に己人の爲め有利たると同時に國家のため有利のものなれば益々發達を謀らんことを望むと陳べ是にて演説を終り殖栗順平氏の謝詞あり全所に於ける聴衆は繢業家と始め有志者等無慮二百名にして妙所／＼には拍手喝采し堂も爲めに破ると許りなりき而して伯爵殖栗氏の謝詞終るや大隈伯爵万歳の聲に送られ静々と堂を出で

陛下にて小憩夫より腕車にて鳳澄亭に於ける歎  
迎會迄赴けり時に午後三時二十分なりき

◎大隈伯爵歡迎會景況

大隈伯爵は去る十一年　御巡幸の節扈從して來  
越せし以來久方振りの來団なるが長岡及び近郡

の官衙吏員公吏名譽職吏員民間諸團體員等總ゆ  
る方面に於ける重立百七十餘名發起となり豫定  
の如く昨日午後三時より眞澄亭に於て歓迎會を  
催したり、會場門前には大綠門を造り之に荒繩  
、縊其他の農產物を以て「歡迎大陸伯」の五字を  
現はしたる匾額に大國旗を交叉し構内及園遊會  
場には各國々旗と紅燈とを鮑釣とし樓上なる會  
場の周圍には紫幔を繞らす等の裝飾を施したり  
斯くて伯爵の一行車を接して會場に入るや爆發  
を爲し一に行げ少時休憩の後再び爆竹を發し此を  
合図に會員一同樓上の會場に着席するや剝壳た  
る奏樂（新潟音樂隊の）の聲と共に伯爵の臨場あり  
是處於て發起人總代として代議士三輪潤太郎氏  
は開會の趣旨を述べ次に（此間奏樂）波多野傳三  
郎氏の紹介に依りて伯爵は演壇に登り國の進歩

は總て外部の刺激による事を説て日本今日の文  
明が四十年前ベルリ波來に原因するを隙べ夫よ  
り租稅問題に移りて稅は總て生産力を傷けざる  
を本旨とせざる可らざる事より消費稅を徵する  
の最も適法たる事總て地租增課の惡稅たる事を  
説き尙ほ轉じて新陳代謝論となり萬物總て新陳  
代謝なくんば發達進歩なしと断じ政治の腐敗も  
閥族占權の弊より来る事を喝破し凡ろ二時間に  
近き大演説にてありたり

右終りて降壇するや正六位桐生吉英氏伯爵臨場  
の勞を謝し(此間奏樂)次に澁谷善作氏の發聲に  
て一同 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り次に會圓  
は大隈伯爵萬歳を三呼し奏樂と爆竹との合圓に  
て一同退座したり

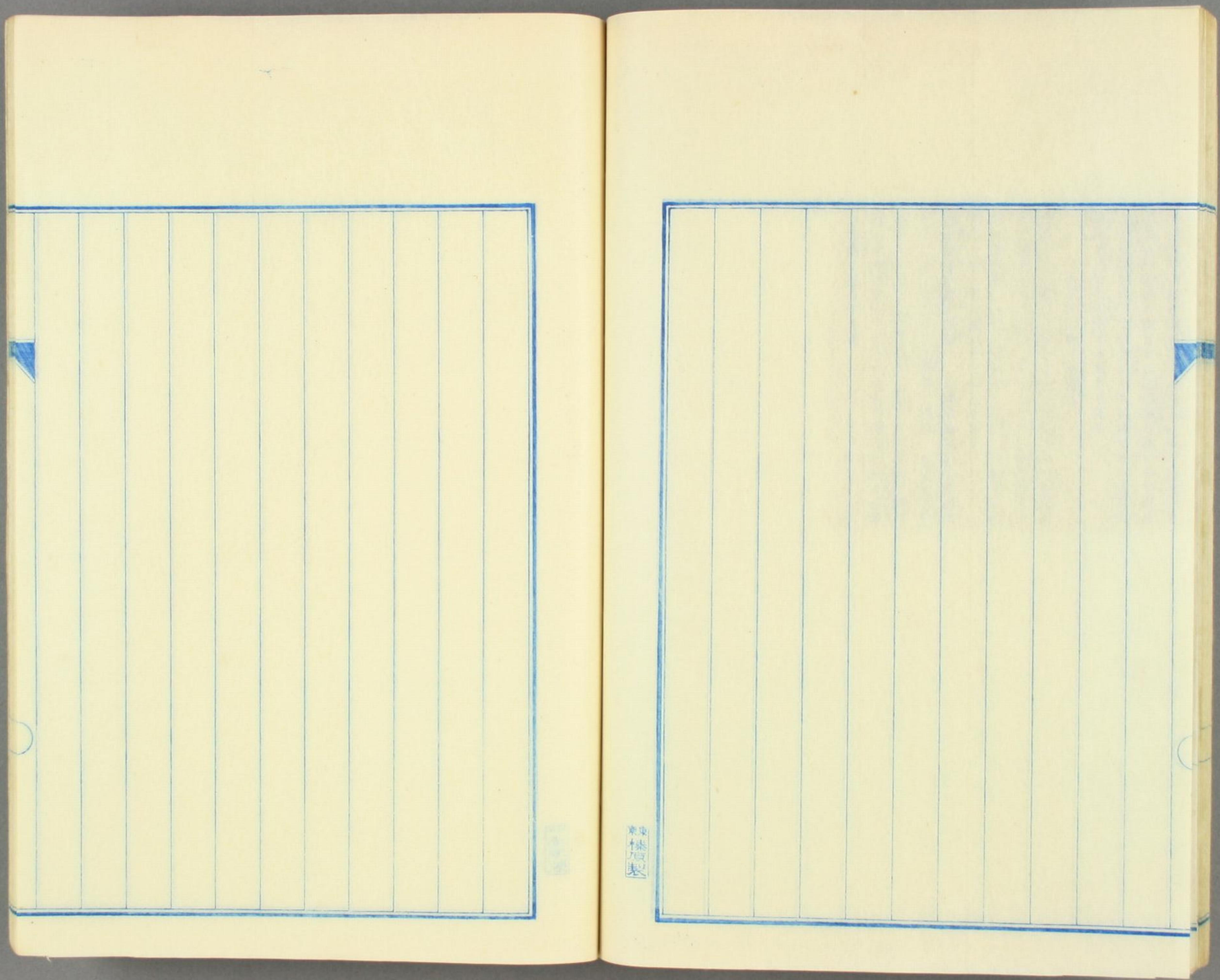
夫れより設けの園遊會場にて折詰渡所、酒店、  
茶店等に就きて酒饌及び紀念の盃を受取り或は  
喫茶を爲し三々五々設けの休憩所に於て各々献  
酬となし此間奏樂の餘興及び紅裙の斡旋あり最  
後に藝妓け長岡甚句の踊りを爲し賓主孰も和氣  
滿々の間に退散したるは午後六時過ぎなりしが  
當日の來會者け凡ろ七百名にして近年當地に於  
て曾て見ざるの大盛會なりき

◎石油家へ伯の懇話　大隈伯は昨夜旅館なる常盤樓へ當地の重もなる石油業者數十名を招き石油事業に對してげ合同して從事することの緊急なるとに付懇話する所ありたり

◎伯の出發、柏崎行

大隈伯の一宵は今廿八日午前九時十分長岡發上り二番列車にて出發し同十時三十二分柏崎に下車午後三時より西光寺に開く同地の歓迎會に臨まれ一泊し明日歸京せらるゝ筈なり

○長岡警察署の警衛　大隈伯來潤に付長岡署にては伯の來往する道筋及び旅館、集會所等警護のため初尾、興板、新潟、高田、三條其他の警察署より應援を得て凡ろ六十名の警官を夫々配置し警衛を怠らざりき



(五) 號一十八百六千八第刊修鑄學問新知錄

（三河）本  
當會社は毎日保險の申込を受く規則書は御  
申越次速早速送呈可仕候  
支店は大阪京都名古屋福岡金澤の五商町に

佐倉義民傳

義民傳

「何うかなさいましたかって、何だか  
苦エやうな甘エやうな癡平吉だ、もちら  
良い茶はぬエかな」<sub>女</sub>左様でござります、

當會社は毎日保険の申込を受く想則書は候  
申越次第早速送呈可仕候  
支店は大阪京都名古屋福岡金澤の五商所に  
あり且他内國及び外國に代理店三百餘箇所

速記法研究會々員速記  
牛「忠源さん豪ア雪が降出しましたな」「  
うさ、もう昨日あたりから催して居たが  
どうく雪になつた、ア、く國に居れ  
雪正月といつて斯う云ふ時には手造り  
酒でも飲んで頬ぐだけれど。信所うやつ  
大事な事を引受けて江戸へ出て居ては、

良い茶はねエかな」「左様でござります、  
之は宇治の玉露でござりますが御氣には入  
りませぬか」「何だか知らぬエが氣に入ら  
ねエ、第一入れ方が不可ねエ」「何う云ふ  
鹽梅に入れますので」「せう云ふ鹽梅ヲテ  
砲烙でがらく煎つて袋へ入れて煮出すの  
だ、俺共は何うでも構はねエが、今に旦那  
の雪隠にて

わケ里地内國及び外國に代理店三百餘箇所  
東京市麹町區八重洲町一丁目一番地  
萬國保険株式會社  
行人規則書上御申越次第早速送呈可仕候支  
店は大阪京都名古屋全仙臺岡山福岡長崎  
の八箇所其他全國に代理店四百餘箇所あり  
東京市麹町區八重洲町一丁目一番地

の者はせんにか苦勞をして居る事で  
いませう」牛「大きに左様だ。オウ／＼ド  
＼降りますで、是は十分積るわい」ビリ  
をし乍ら漸々の事で上野の三橋の此方ま  
參りました、見ると向うに武藏野と書い  
行燈の出て居る御茶屋があるから  
「ア

さうでござります子。一つ聞いて見ませう」と女中はクスク笑ひ乍ら見世へ来て「おのおの内儀さん御茶が氣に入りませぬつて」「ナニおの御茶で氣に入らない、本當に此頃は田舎の人が贋深くてなつて……」「イエさうぢやないんで。何

名主、身体へ振掛けた雪を拂る乍ら  
イ御免下さいまし」と門口を開けて下さい  
家内へ這入つた、すると女中が二人其所  
居りましたが「入らッしやいまし」  
エ、武藏野さんは此方かい」「ハイ、  
方でござります、貴客方は石町から入ら  
しやいましので」「ハイ石町から參りま

ハ 炮烙でガラ／＼煎つて袋へ入れて焚出した  
とのを持つて來いッて、わの番茶の事でござ  
に いませう」お内儀は思はず吹出した「吃  
度さうだよ、早く持つて往つて御上げ」「  
ハイ」夫れから焦げるやうに番茶を煎じて  
夫れを畏ろしい大きな土瓶へ入れて、大き  
な茶碗を付けて持つて來た「あの是れで

一白米四万四千貫々 一割麥一万三千貫々  
右賃貢す六月廿九日の官報を見るべし  
**東道頭領貢使守府**

あの向かう一人来て居りますか?」「いや未だ御入來にはなりませぬが、石垣から人來るから、其時には案内をして呉れどもう御話がございました」「フーム、忠さん、まだ高津の旦那殿は此方へござらしやらないと見える」「さうさ、併し旦那から話がしてあると云ふなら上つて待て若狭守一「夫れが宣からう一發で六

エ 六 藏 つ な 那 つ 人 えん  
し」半十郎主茶を一口飲むと「やア是だ  
是だ、だから江戸の者は黙つて居ると人を  
馬鹿にしやがつて困るだ、俺が一言言つた  
ばかりで斯う云ふ良い茶を持つて来るだも  
の、さア／＼皆な飲ませエ／＼」一成解  
是は良い茶だ、先の茶の悪いこと……一成解  
で反対を言つて居る、左右して居る所へ料  
理ふざく居て居る、左の者へは

程の座敷、雜作は最も良く出来て居ります  
花と云ふ掛軸と云ふ相當なものが掛つて  
る、六人の生ると直に手焼きを持つて来る  
裏内に一人の女中が夫れへ参りまして、足  
る前で湯冷器へ湯を取つて茶を入れる。  
人の前へ鎧々菓子でござります、どうも

付ける者もありませぬ、然る所へ宗五郎様  
れて参りまして爰で一同の者へ大事を明し  
まするの御詫

既に定評あり△六月十六日午前九時掃除立、同廿二日午後四時二郎の桑付奉上。族は七月十三日頃、製所以同廿五六日五分付一枚へ蛾星十二送費此。

います　牛「之は誰が注文へたのだ」「誰も  
注文へやしねエ」牛「けれど注文へもしな  
のに此様な菓子を出して何うするだ、迂  
かり食るなさんな、其羊羹を一切食つて  
貰ひ取られたら大變だから」牛「悪いかな  
」「悪いとも、六郎兵衛さん何にをして居  
た」一鳥渡上つ皮と骨のて見た牛「何を六  
郎内に御茶を酌いで六人の前  
へ出した」牛「さうぞ召上つて下さいまし  
牛「ハイ……」牛十郎夫れを一口飲むと驚  
て吹出して仕舞つた、外の人々も同様牛  
は跡は駄目だ……」「何うかなさいましわ

此兒童寫眞器は風景人物其他御好みの書  
画は何でも寫す事の出来る至極面白き機  
械的文明の玩具也

一組郵稅共金十七錢

製造元 東京市京橋區築地二丁目四十二番地 雨森商店

第十回 夏期講習會員募集中

日本館以例に依り來七月廿日より八月廿八  
日迄左の學科の講習を開く有志者は至急  
申込べし。規則入用者は郵券二錢を送れ

英語 獨逸語 数學 物理化學

漢文

學

東京市神田區三崎町 一丁目三番地

此の預定△購貰御希望の向は七月十五日限り前金相添へ御申込破下度候  
長野縣東筑摩郡本郷村後間

金田屋 降旗元太郎

廣 告

新報新聞を始め全國新  
聞雑誌廣告大取扱

東京市京橋區尾張町二の二十五

廣告大取扱 弘 堂

電話三一六〇 新橋八百五十一番

次第 御廣告り特に割引  
社迅速便利に取扱

告

一組郵稅共金十七錢  
筆寫眞器は風景人物其他御好みの書  
内でも寫す事の出来る至極面白き標  
文明の玩具也

金田屋  
降價元太郎  
頃の預定△購買御希望の向は七月十五日限り前金相談へ御申込破下度候  
長野縣東筑摩郡本郷村後間  
金田屋  
降價元太郎

第十四回 夏  
日本館以例に依り、永七月廿日より八月廿八  
申込べし。規則入用者は郵券二錢を送れ。  
○漢文 ○獨逸語 ○數學  
○物理化學



地方行政の振興するべきは、何を措て以てせざる可からず方行政の紊乱を以て置き歸するものあれども、らざるものなり如きは市町村役場は必ず呈し、太甚しきは、擴張費に供する地方がさしく黨弊横流の患害も、之れをして然らし當局者が其の正當の職權を厲行せしめ、閣にして、嚴に地方行政の職權を厲行せしめ、のを處分するに於て、黨弊横流の如きは刃

地方行政の振興  
桂内閣に望むべきは、何を措ても先づ地方行政の振興を以てせざる可からず世間或は地方行政の紊亂を以て單に黨弊横流の結果に歸するものあれども、是れ一を知て二を知らざるものなり  
或る地方の如きは市町村役場は殆ど政黨支部たるの觀を呈し、太甚しきは、公費を以て公然政黨擴張費に供する方なきにあらず、是れ正しく黨弊横流の患害たるに相違なしと雖も、之れをして然らしめたるは地方行政の當局者が其の正當の職權を厲行せずして、反つて政黨の手先と爲れに由るされば桂内閣にして、嚴に地方行政官を戒飭して、其の職權を厲行せしめ、之れを厲行せざるものと處分するに於て毫も躊躇するなくむば、黨弊横流の如きは又何の憂ふる所ぞ

べきは、何を措て以てせざる可からず行政の紊乱を以て置するものあれども、さるものなり

庫の西村淳藏の如きは星が袖裏  
り居りしが東北の菅原傳を介して  
須賀穂、香川の堀家虎造等を羅  
盤は中國四國に廣まると共に九  
り事情斯の如くなれば直參派及  
りて松田の勢範をも覗はんづる密  
星の此計畫に對して裏を搔かん  
し居れるが故政友會の遊説部署  
するも知るべからずとなり

庫の西村淳藏の如きは星が袖裏  
り居りしが東北の菅原傳を介して  
須賀穂、香川の堀家虎造等を羅  
盤は中國四國に廣まると共に九  
り事情斯の如くなれば直參派及  
りて松田の勢範をも覗はんづる密  
星の此計畫に對して裏を搔かん  
し居れるが故政友會の遊説部署  
するも知るべからずとなり

明治四六年六月一日 朝日新聞 (可認物使郵便第三種五十二年三月七日)  
は▲れば散のて散々虚に采非望ましにのりのせのの△の手と脇ある  
午砂らかに室と隣の近に詔を以て持ててお

報  
第十九回（北海道全部）

卷之三

△ 分限

令を楯に飽まで噛り付いたは同會本部内閣も地方行政の上に自黨の勢力を利用せしむるは悪い了見△地方天職ドジ／＼屬行して假借する勿れ△臺總督を置れてから三年と二ヶ月創業の部はまさに終り守成の時代に入ると後藤政の談△華族北清軍隊慰問使の一<sup>行</sup>三真先に其理由を質問され返事に窮す△河滋賀曰く無責任時代の乃公と責任のあ庄屋さんとは違ふから餘儀なく大人しくて居るのだ△男爵夫人田尻よし子似たの夫婦で大のスマリ屋傳通院大黒の縁日馬の爪の櫛やら染かへしの頭掛を買つてに入る△日比谷公園の名か名なんぞは替たつて構はない太田林、徳川池、大間前亭、松平伊豆守信綱瀧なんぞば妙だらうと石黒况翁いふ△林有造妻を携へて漬車に乘り知人に奥さんですかと問はれハイ家内は國に居りますと返答が面白い△望小太森に望月家別荘新築用道路と高札かげて人を驚かす△香氣俱樂部は極く質素故は總菜ときめてあり後藤新平サシミを食たいと云出して奢らさる

暗中歡迎の二字顯はる 新潟に於る専門  
學校々友會は稀有の盛況なりしかば伯は  
愉快を感せられ後進の皆下と相共て炎

し居らるゝ内、肅然として煙竹一齊に發するを合圍に庭中の正面に仕掛けたる煙花は暗夜を照して白晝の如く開く樹間を通して之を眺むれば歓迎の二字顯はる會衆一同拍手して之を喝采す上田の打揚げ煙花と一對の趣向にて伯も其用意を喜ばれたり

▲伯の退席を希望す 初め會幹中には餘興の爲め新潟特有の舞踏を伯の蹕に供せんとの議ありしが遠慮論勝を制して其議は見合せと爲りたり酒數行、會員中貴めては新潟の特色たる酒樽を叩きて節調を取り列を作りて舞踏する益踊りを見たしと所望するものあり左れを伯に遠慮して未だ履行さるゝに至らず川上淳一郎氏は伯が長途疲勞を察し能き潮合を見計らひて「伯爵の退席を希望致します」と大呼す伯は「追ひ出され大喝采に送られて退席せらる跡は遠慮派、非遠慮派相合して例の益踊りを見る酒樽の音急散の如く三絃之に和し酌人數十名列を作りて唱和し節調を取りつゝ舞ふ衆陶然たり伯の室は庭を隔つるのみ其聲手に取るが如し散じて會幹伯に候す「我輩を追ひ出して音ばかり聞かせるとは殘酷な趣向だ」と戯みれらるゝ

▲砂山を越ゆ 廿六日新潟に於る伯の日程は午前八時新潟市背面の海岸砂山に催ふさるゝ縣下各學校生徒の連合運動會を見物し

は笑ひて對する拍興と合音洞くも作つて希祭うももは化す  
学校々友と共に撮影せらる寫眞師は九段  
鈴木與一氏の弟子なり伯は容貌も何と無く  
數十發の煙花を合圖に歓迎會の開會と報じ  
らるゝや來會者の會場に入るものの陸續な  
り歓迎會場は伯の旅館たる行形亭と隣なる島清樓とを以て之に宛て園遊會の趣向  
と爲したれば伯に取りては極めて便なり

## ◎ 静岡の政の影響

(第三十五銀行の危機)

静岡の縣官が政友會派と結び付きて有らん  
限りの秕政を行ひたる結果は散々に同地方  
社會の組織を破壊したるが是れも其影響の一にして静岡地方唯一の大銀行とも云ふべ  
き第三十五銀行が預金の取付に會ひ四苦八  
苦の境遇に立ちつゝあり同銀行は縣下に於て殆んぞ第一の金融機關として同地の財界に信用せられ來りしが同地政友會の勢力を  
張らんとの魂膽より高襟黨の松本君平氏が  
管理する静岡新報は先づ頃、第三十五銀行の破綻を暴發するとして大々的の豫告を發し  
たる末、一面三十五銀行へ向け談判を開き  
金一万圓を提供せば記事を見合すべしとの事を掛け即金五千圓殘額五千圓は延にて  
回しとの條件を提出せしが其談判折れ合は  
ざりし結果として更に政友會員伊東要藏な  
件を提出し遂に銀行を墜服してのい

静岡社政の影

の 後 緒 た な う 同 次



卷之三

◎信越行記(廿二)笠山

▲長岡鐵業會に於る伯の演説 大隈伯は長岡の歓迎會に臨むに先だち同地鐵業家の團体たる鐵業會議所に臨まる來會者二百餘名にして伯は發起人に紹介せられたる後余は廿餘年前車駕に陪して當地を通過せるときは成長戰後の回復全からず實に慘憺の狀を呈したりしが當藩の奇傑河井氏の後を承けて長岡の回復に勉めたる三島氏が専ら開墾養殖等の經營を以て徐々に產業を起さんとせらるゝの時なりしが今や當地を通過するに及びては屬目一望繁盛の狀驚くべきものあり是れ近時起工されたる石油の賜ものにして長岡人士が三島氏の遺意を承け此一大天產の採收を始められたる結果に外ならず而して余やは鉛業に於て一外漢なりと雖も石油に付て世紀以前に於て一般の需要に供されたるものにして其以前に於る石油は實に藥種の一品として藥局に保藏されたるに過ぎず然るに一たび之れを一般の世用に供するることを知るや非常の進歩を以て採収精

實に諸君が重視さるべき要件なりと信ず  
との要領を以て演説せられ特に當業者諸氏  
の感動を惹きたり斯くて伯は事務所に就き  
て諸種の統計等を批評し午後三時過る頃歎  
迎會に臨まる

○山梨縣ペスト發生彙報

去る二十日山梨縣北巨摩郡甲村二百四十七  
番戸五味胤雄(ヤセ)なるもの眞正ペストに罹  
りたるを以て其筋にては是非共其病を局  
部に撲滅せんとて熱心に檢疫豫防をなし居  
れり其模様を掲げむ

▲患者の豫後 患者は直に避病舎に收容し  
たるが豫後は佳良なれども未だ發病の原因  
を確め得ざるを以て今尚ほ調査中なるが同  
患者は年齢十七八歳の農夫にして六月十二  
三日の頃右足趾尖に小創を受けしも異狀を  
呈することなかりしに、二十日の日突然全  
身違和惡寒戰慄を發せしなりと

▲交通遮斷 全村二百七十戸の中患家及び  
患家と交通せる九戸五十四人に對しては規  
定の消毒法を行ひて一定の期間内交通を遮  
断し附近三十一戸も之れに準し殘餘二百二  
十一戸に對して清潔法を執行することとな

左倉義民傳

六十九

An illustration of a woman in traditional Japanese clothing holding a tray. On the tray are several items: a large brush, a small pot, a book, and some dried leaves. The woman is looking towards the right.

清水燒

A vertical illustration of a person from the waist up, wearing a traditional Chinese robe. They are holding a long, thin staff or pole vertically with both hands. The background is plain.

佐倉義民傳 六十九

桃川 實講演  
速記法研究會々員速記

宗「左様、先づ大死でござりまする」「そう  
も其方に似合はぬではないか、同じ命を棄  
てるならば領分一同の者を助け、潔よく御  
處刑になる事を心掛けぬ、なせ頼うべき所  
へ頼はぬ」「へイ……同ぬまするが、頼  
べき所と申しまするは何でござりますか」

圓「當月二十日の終る御成を待つて、山内御  
靈屋の内にて將軍家の御袖へ縋り直訴致し  
て領分一同の者を助けて遣はせ」「へイ、  
恐入りました事乍ら士民宗五郎。中々御靈  
屋へ忍びまする事なし思ひも依りませぬ」

圓「イヤ〜元より其方が幾ら御靈屋へ忍  
ばうとしても、其方一人の力では到底出来  
ぬ事ぢや、忍ぶ手引は此圓壽が致して遣は  
す、と申すと出過者と思ふであらうが、實  
は拙僧も下總佐倉の生れ、父は甚右衛門と  
申して矢張り名主を勤めて居つた、先代加  
賀守正盛殿が印鑑新田開拓を思立つた其  
砌り、父の甚右衛門なる者は先祖より傳は  
る書類を以て御意見を申上げたる所、加賀

う、サアく圓壽の部屋へ参れ、茶なりと  
入れて語り明そう」「恐入りました、然ら  
ば御言葉に従ひまする」と夫れから圓壽殿  
の部屋へ参りまして夜明けまでの物語、宗  
五郎大いに力を得ました、偕夜が明けます  
ると書面を認め、例の六人の者を呼びにや  
りました、御話岐れて忠職始め六人の名主  
共は、總代の宗五郎が酒井様の御駕籠へ鉤  
つて夫れが御取上になつた様子を見ると直  
に下總屋武右衛門方へ取つて返し今に何と  
か御沙汰があるだらうと夫れのみ首を延し  
て相待つて居りました、所が三日経つて  
五日経つても何の沙汰もございませぬ、さ  
ア六人乍ら鬱いで仕舞つた、小原村の牛士  
郎が「忠職さん、是はモア何うしたでござ  
いませんな、旦那どんから何とか沙汰が  
わうそうちなものだが……」「さうる、一旦  
願が上つて見ると俺共は呼出される約束が  
んだけれども少々とも其様な氣振もないの  
は、どうも可詫いな、六郎兵衛どん何うが  
子」「先づ俺の考では酒井様の御屋敷で口  
那どんは首でも斬られましたかな」「成程  
一旦願を取上げて置て、画倒だと云ふの  
首でもチヨン斬つたかな

八十七日六事ノラレタ  
御手討と相成つた、家財は欠所になり妻子は追放、欠所金は残らず不淨藏へ收め、印旛沼新田開拓の入用に供された。夫故堀田家には怨みはあるとも恩はなき此圓壽、實に今日領分百姓共の困難を聞くに付けて居るうかして之を助けてやりたいと思つて居る依つて直訴の手引は拙僧が致して遣はす」宗「へイ、夫れは誠に難有き事に存じまする手前は元より總代の事、逆磔刑に相成りましても聊か御怨みとは存じませぬ、只領分して一同の者を助け一日たりとも安堵の恩をさせなく存じまする、して二十日の終る御成の節は何う云ふ事に致しませう」圓「イヤ其る者は何者だ」「エ、名主其六人でござります」「夫れは如何致した」「石町三丁目下總屋武右衛門と申しまする荒物問屋、昔も國者でございますが、此者の中二階を借受けまして忍び居りまする」「左様か、夜明次第に書面を認め其六人の者を呼寄せ、早々御處刑は遁れぬ身だ、して見れば跡々の事を其六人の者へ依頼をして心残りの上話、万端の手配は寛々話を致すであら

卷之三

卷之三

(和泉) 摸摸鳥 段通

# 年中無休刊

(五)

第十八百六十

## 信越陪行記

(廿五) 箕山

▲足ある大限伯 柏崎の歓迎 會了りて内  
藤久寛、三輪潤太郎、山田順一の諸氏東道  
主人と爲り市島謙吉、波多野傳三郎、大石  
熊吉の諸氏と一旗亭に小宴を開く秋野左門  
氏微笑して杯を重ね歎美數回、秋野氏起  
立して酌ひ暫くして酌人三五名來る三輪氏  
直ちに「大限さんへ御酌をしろ」と命じ秋  
野氏頗る禪味を帶ぶ新潟長岡の間大限伯  
と爲す柏崎に泊するの夜余先づ伯に候す  
古我氏の風采を評し「高野聖は」と問はる  
師は晝夜兼行だからと評しつ、「高野聖  
も無く古我子至り余が長岡の停車場に  
抱を置き忘れたる失策談を語る伯」「奈良法  
が道に支ふる能はず伯の舌鋒は一轉して奈  
良法師に及び兩人達々の体にて別室に避く  
柏崎發程 伯は廿九日午前七時三十五分

▲高野聖と奈良法師 朝日の古我雅芳氏圓  
顔に五分刈の髪を戴き沈黙にして時々警句  
を吐き頗る禪味を帶ぶ新潟長岡の間大限伯  
のと爲す柏崎に泊するの夜余先づ伯に候す  
古我氏の風采を評し「高野聖は」と問はる  
師は晝夜兼行だからと評しつ、「高野聖  
は今日の歓迎會場に見えなんだがドウか  
したか」と問ひ「大分眼中が赤いのは怪し  
い」と問ひ一問は一問とも急なり聖始めは  
「ドウも越後は睡い國です」一杯受け流せし  
が道に支ふる能はず伯の舌鋒は一轉して奈  
良法師に及び兩人達々の体にて別室に避く  
柏崎發程 伯は廿九日午前七時三十五分

▲山陰より平原 漢車は海水の山陰を過ぎ  
高崎に至りて平原稍や廣く本庄深谷を鑿て  
熊谷に至り地熱大に厥開す此邊に至りて暮  
色蒼然。熊谷堤の強盜談を思ふて昔日の旅  
行困難の狀を想像す鴻の巣以南は暗々の裡  
に過ぎ午後九時四十分上野に着す伯と迎ふ  
に基くを稱し其厚意を謝さる

（終）

柏崎發列車にて歸京の途に就かれ一行は午  
前七時旅館を發す同志者數百名車を列ねて  
伯を見送り停車場前の畠中に煙花を打ち  
揚ぐること前日の如し斯くて伯は万歳の祝  
聲に送られ三輪、山田、渡邊其他の同志及  
び川上、廣井等の校友諸氏と同車して柏崎  
を發す重江津に至りて長岡柏崎方面の諸氏  
に辭して分れ高田方面よりは室孝次郎、  
太田彌次右衛門諸氏外製名、直江津に出迎  
え、漢車進みて高田驛に至れば同志數十名停  
車場に待ち受けて伯に敬意を表す漢車は轄  
路關山に至りて是より長野縣界なり青木警  
部長は保安課長を代理として長野迄伯を送  
ること、し此にて伯に辭す此行青木警部長  
の盡力は一行の感謝する所にして伯も亦た  
深謝せらる室孝次郎氏始め高田の諸氏亦た  
此辭にて分れを告ぐ之より先き波野氏は所  
用ありて直江津より長岡に引つ返したれば  
一行は俄かに其數を減じ伯は寛がるゝを得  
たるも「多人數の方が面白い」とて平民族  
行の本色を發揮せらる

▲上田有志の敬意 漢車長野に入れば新潟

警察保安課長及び護衛の警官は此にて伯

に辭し長野市長、長野警察署長及び小池平

一郎氏待ち受けて伯に禮す上田よりは有志

者五名伯を長野迄出迎へ前日の來遊を謝し

同車して長野を發す上田に至れば樂隊の奏

樂と煙花などを以て伯の行を送るの外同志者

二百餘名停車場に在りて伯の万歳を祝し同

志數名輕井澤迄伯を見送る其禮遇意を用の

たりと謂ふべし

▲輕井澤の告別 上田の有志及び伯發程の

當日高崎迄出迎へ爾來身を以て各地に伯を

警護したる早川富五郎氏は輕井澤にて伯に

別れを告ぐ廿三日より今日迄約一週間睡眠

不足の爲め一行頗る疲勞す而して早川氏は

無し伯其壯年以來輕風沐雨鍛鍊したる素養

に基くを稱し其厚意を謝さる

（終）

新 聖 錄 丙 二 月 七 日 星 期 三 (西曆 一九四〇年三月) (六)

佐倉義民傳

卷十七

を頼む仰やるのぞこちひなすか、エ、承知

川實講演  
總記研究會員速記  
宗「其後酒井様の恩召しで私は當上野山内へ預けられました。夫れで私は無事で居りますやうなものゝ併しあうして居りましては皆様始め御領分一同印東印西の人々へ歸して相済みませぬから、實は昨晩含み狀の用意を致しまして、今朝は御領主様の表額門前で切腹致をうと覺悟を致したのでござります」忠「ダメム、せうか其様な氣な事として下さへますな、今愛で旦那殿に万

致しました、是だけの大事を一人で引受け  
て願を上げて下さる日那様、若し御處刑に  
でもなりました後は、産神様より大切に致  
します、小供衆や御新造御老母の所は何う  
でも致しますから、何分宜しく御願申しま  
す、俺共が出て可い事ならば共に駆を上げ  
たう存じますが、さう云ふ譯にもならず：

宗一「イエ今御詔申す通りの次第、私一人  
が忍ぶのさへ能々な事でござりますから、  
貴下方へは冥土から又御詔を致しまする」、  
言ひつゝ宗五郎は初を開いて取出しをし

廣  
告

驚く日本の大發明  
複方克快丸は  
其効克快丸に二倍す  
大醫陸軍々醫藥監  
林紀大先生發明  
御傳方にして

かつけりウマチス  
五年十年の長病も  
貳劑服せば全快す



かつて病者數萬人  
實驗の結果轉地  
たて全快しむ

大効服なれば良也すべす  
此劑壹圓五拾錢壹劑七拾五錢半劑卅五錢  
警戒處所人頭明治廿七年八月  
びつくり日藥小瓶拾錢  
一切の眼病によし俗に雲切目やすり

淺草並木町  
大阪高麗橋  
大木會社順天堂會社  
小山連綿堂  
安州商店  
置會社  
大木口哲堂  
資佐寶十全堂  
生谷森崎山帝國堂  
堂守丹  
木

北海道北見國枝幸港已其本杏林堂  
流行夏帽子其他夏物類輸入候間  
**正札**に安賣仕候メ御真  
三日以内外品代金何れ共引換候  
支拂候  
支拂候  
支拂候  
支拂候

三  
神田区役所  
町十一番地  
電話本局  
松屋萬七  
二百六十九

以下全て  
白紙

御内二年四月廿五日  
下流

支那事人